

4 たまねぎの収量要因と今後の対応

豊作となるためには、6～7月は日照が多く適度な降雨があること、8月は日照時間は多く気温は低めがよいとされています。

【1】平成27年が高収量となった要因

- ①春作業が順調に進んだ
 - ・ほ場が乾いた状態で耕起でき、移植は順調に進んだ。
 - ・移植期間中は風が強く茎葉の消耗見られたが、根の張りは順調で活着は良好であった。
- ②適度な降雨があった
 - ・生育期間を通じて極端な少雨や過度な湿潤条件がなく、適度な土壌水分が維持された。
- ③枯葉が遅れた
 - ・ほ場水分が十分確保され生育終盤の玉伸び期間が長くなり球肥大が促進された。
- その他
 - 鬼皮の着色が遅れ収穫作業が遅れるとともに、裂皮が多く見られた。



図4 強風による茎葉消耗

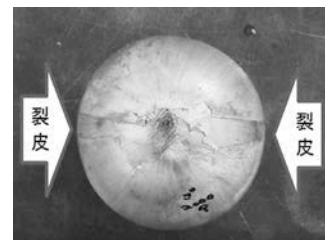


図5 選果時の裂皮

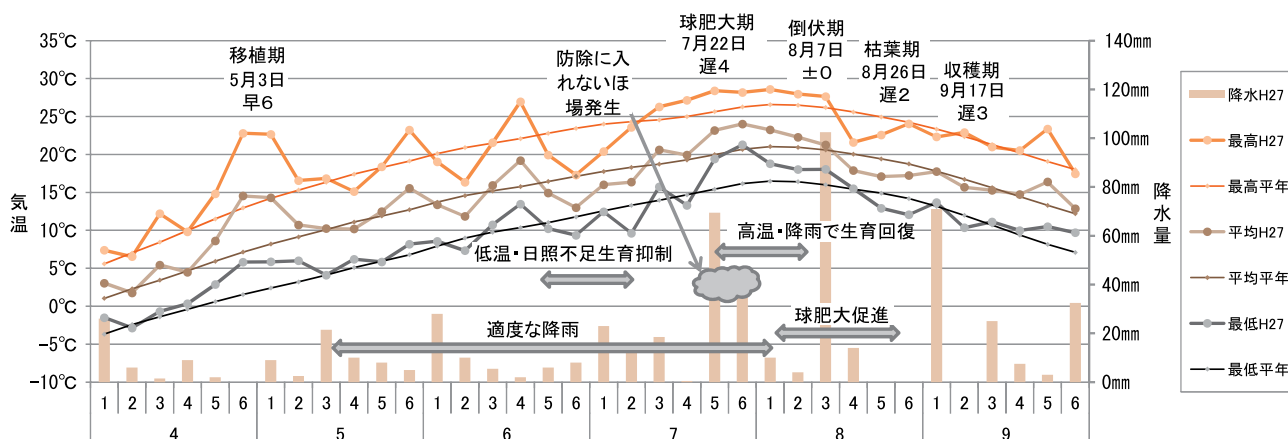


図6 生育期間中の気象経過

【2】病害虫の状況

病害：6月に小菌核病、7月に白斑葉枯病・べと病、収穫時に乾腐病・軟腐病が発生し、一部に多発ほ場も見られましたが概ね抑えることができました。

害虫：ネギアザミウマの発生時期は遅く発生量はやや多となりました。

【3】今後の対応

平成27年は、防除通路がぬかるみ、防除に入りたくても“機械が入れない”ほ場が見られました。明暗渠や心土破碎などの排水対策に加え、防除を実施できる準備が必要です。

- 天気予報を考慮した計画的な防除
- 残効の長い薬剤の使用(白斑葉枯病)
- 防除通路の踏み固め
- 多湿条件でも走行可能な機械の利用(セミクローラトラクタ、パンクル)



図7 病気で枯葉が早まったほ場(左)と通常のほ場(右)